

大阪方言の1拍語を先行語とする 複合アクセントの年齢による変化

杉 藤 美 代 子
中 納 千 佳 子

1. は じ め に

近畿アクセントは、他方言のアクセントと大きく異なる特徴をもっている。その1は、高起と低起の型に大別される点であり、その2は、1母音中に音調変化を持つ単語がある点である。とくに1拍語には、高起の高平型(●)と下降型(◐)、及び、低起の上昇型(◑)等3種の型があり、母音の持続時間が長い等顕著な特徴が見られる。

1拍語の単語について大阪方言の音響的分析資料を作成して調べると、単語を読んだ場合も、絵を見て話した場合も高起、低起の別は守られることがわかる¹⁾。このような、高起、低起の発話の別は発話に先立つ生理的な機制によるものであり、このことは、発話時の喉頭筋電図により実証したところである^{2,3)}。

また持続時間については、漢語の持続時間は短いが、和語及び日常語では長く、同一のアクセント型の単語においては2連母音又は長母音を持つ2拍語と持続時間において有意差のないことが明らかになった⁴⁾。

このような音響的、生理的特徴を持つ1拍語を先行単語として、これに、1拍語その他の単語を接続した複合語のアクセントをも検討する必要があると思われる。つまり、複合語の場合には、一般に先行する1拍語の持続時間は長くならず、この場合にも単語の高起低起の別が保持できるか否かをも調べるためである。これについては年齢層による変化をも検討する必要がある。

近畿方言の複合語アクセントについては次のようにのべられている⁵⁻⁷⁾。

1、先行単語が高起式ならば複合語も高起、低起式ならば複合語も低く始まる。

2、複合語のどの拍から低くなるかは後続単語のアクセントによる。

それらはいずれも2拍語、またはそれ以上の単語からなる複合語についてのべられており、1拍語の場合は上記の規則が当てはまらなるとされ、これを先行語とする複合語を扱った論文は見当たらない。

そこで、1拍語を先行単語とする複合語について、その前後の単語のアクセント型と複合語アクセントとの関係を生粋の大阪方言話者、高年齢層と若年齢層の発話を対象として検討し、若年齢層のアクセント変化の傾向を調べた。

なお、近畿方言の1拍語は、さきにのべたように複合語中にあるのは短く発話されるが、助詞を伴って「～の～」となる結合語においては、1拍が長く発話される傾向があり、ここでは、音響的実験資料をも提示して、この問題をも併せてのべることにしたい。

2. 研究の方法

ここで扱う主な1拍語名詞は37単語であり、アクセント型の類別に従ってそれらの単語を示せば次のとおりである。

	型	所 属 単 語
高	(第1類) 高平型(●)	医、柄、蚊、気、黄、子、巢、凶、背、血、戸、帆、穂、間、身、実。
起	(第2類) 下降型(●)	胃、毛、名、値、葉、齒、日。
低	(第3類) 上昇型(○)	絵、尾、木、粉、酢、田、茶、手、菜、根、野、火、目、湯。
起		

これらを先行単語に持つ複合語を、名詞、動詞、形容詞の3品詞につき、アクセント辞典⁸⁹⁾より抜き出し、それら897個の複合語と、上記の1拍語名詞、及び、後続単語1～4拍の名詞と、動詞は終止形、連用形を、形容詞は終止形をそれぞれ録音の対象とした。

発話者は下記の6名である。

高年(50歳以上): 1. ST(1927年生) 2. AM(1924年生) 3. FI(1916年生)

若年(20歳代): 4. TM(1961年生) 5. AU(1961年生) 6. TT(1961年生)

これらを聴取してアクセント型により分類し、先行及び後続単語のアクセント型と複合語のアクセントとの関連を調べた。

また、助詞「の」を含む複合語については、スペクトログラフにより音調及び持続時間について検討した。

3. 複合語名詞のアクセント

3-1. 後続単語が1拍の場合

表1は、3種類の型を持つ1拍語に後続単語が和語名詞1拍語の、2拍語名詞について先行単語・後続単語のアクセント型の組合せ別に、左に高年3名(ST、AM、FI)、右に若年3名(TM、AU、TT)のアクセントをそれぞれ示したものである。

●印○印は高起、低起の別、及び、アクセント型を表わしている。つまり、●は●(／高／型)、●₁は●○(／高低／型)、○は○●(／低高／型)、○₂は2拍目に下降音調を持つ○●(／低下降／型)である。

表1 後続単語が和語名詞1拍語の場合の高年齢層と若年齢層の比較

先行語と後続語		複合語のアクセント ●→●●、● ₁ →●○、○→○●、○→○●					
		高 年			若 年		
	複合語	ST	AM	FI	TM	AU	TT
●+●	蚊帳	●	●	●	●	●	●
	黄身	●	●	●	●	●	●
●+●	毛簪	●	● ₁	● ₁	● ₁	● ₁	● ₁
●+●	日々	● ₁	● ₁	● ₁	● ₁	● ₁	● ₁
	毛羽	● ₁	● ₁	● ₁	● ₁	● ₁	● ₁
○+●	手間	● ₁	● ₁	● ₁	● ₁	● ₁	● ₁
	目処	● ₁	● ₁	○	● ₁	● ₁	● ₁
	根柢	● ₁	○	○	● ₁	● ₁	● ₁
	水戸	● ₁	○	○	● ₁	● ₁	● ₁
○+●	松羽	● ₁	● ₁	● ₁	● ₁	● ₁	● ₁
	火矢	● ₁	○	○	● ₁	● ₁	● ₁
	尾羽	● ₁	○	○	● ₁	● ₁	● ₁
○+○	木々	● ₁	● ₁	○	● ₁	● ₁	● ₁
	尾根	● ₁	● ₁	○	● ₁	● ₁	● ₁
	木目	● ₁	● ₁	○	● ₁	● ₁	● ₁
	野火	● ₁	● ₁	○	● ₁	● ₁	● ₁
	希目	○	○	○	● ₁	● ₁	● ₁

先行単語が高平型であり、後続単語も高平型の場合、語例が「蚊帳」と「黄身」のみで単語数は少ないがいずれも／高／型となる。その他、先行単語が下降型及び、低起で始まる上昇型の場合においては／高低／型となり、とくに若年齢層においてはその傾向が顕著である。しかし、高年齢層では低起の単語が先行する「茶目」あるいは「尾羽」等には／低高／型が見られる。

表2には、表1の結果を高年、若年それぞれ各型別にまとめて数値で示したものである。縦軸の左側の●、○、●は先行単語を、その右側には実際に発話された複合語のアクセント型を示し、上部には後続単語のアクセント型を示してそれらと複合語アクセントとの関係を見易くした。

先行単語、後続単語が複合語のアクセントに与える影響は明確ではないが、先行単語がそれぞれ音調変化を伴わない／高平／型の場合は、複合語も高起の／高／型、1母音中に音調変化を伴う／下降／型の場合は、／高低／型、低起の／上昇／型においても高起の／高低／型が多い。

表3には、後続単語が漢字音読みの場合を表1と同様にして示した。表4は、その結果を各型別に数値で示したものである。

この場合は先行単語、後続単語に関係なくほとんどが／高低／型となっている。しかし、先行単語が低起の「茶話」は高年齢層においては／低高／型となり低く始まっている。例外となるのは先行単語が／高平／型の「図画」である。高年齢層においては下降音調を持つズガ(○●)であり、若年齢層ではズガ(○●)となる。これは小学生から用いる日常語であることと関係があるのか。なおこの場合のズガは助詞がついた場合にはズガとなり5類であるが、若年が／低高／型の「医者」は助詞が付くとイシャガとなり4類のイシャ(○●)である。

これらを例外とすれば表4に見られるように多くは／高低／型であり、先行単語・後続単語ともに1拍語の場合には、それら

表2 後続単語が和語名詞1拍語の場合の高年齢層と若年齢層のアクセント型の実数

先行 単語	後続 単語	●		○		●		合計	
		高年	若年	高年	若年	高年	若年	高年	若年
●	●	1	0	0	1			1	1
	○	2	3	6	5			8	8
	●	2	1	0	0	2	2	4	3
○	●	6	11	6	9	8	13	20	33
	○	3	0	3	0	5	0	11	0
	●	1	0	0	0	0	0	1	0
合計		21	21	15	15	15	15	51	51

表3 後続単語が漢字音1拍語の場合

複合語のアクセント		●→●●, ●→○●, ○→○●, ○→○●			
先行語と 後続語	複合語	高 年			
		ST	AM	FI	TM AU TT
●+●	図示x1	●	●	●	●
	図録x2	●	●	●	●
	医務	○	●	●	●
	医務	○	●	●	●
	気味	○	●	●	●
	匠者	○	○	○	○
	図画	○	○	○	○
	(x1 図画、医書、医学、医師、気宇)				
	(x2 図画)				
	白手	●	○	●	●
●+○	茶話	○	○	○	○
	茶話	○	○	○	○
○+●	絵師x3	●	●	●	●
	茶話	○	○	○	○
	木地	○	○	○	○
	茶話	○	○	○	○
○+○	(x3 絵画、絵馬、茶話、茶事)				
	木地	○	○	○	○

表4 後続単語が漢字音1拍語の場合—実数

先行 単語	後続 単語	●		○		合計	
		高年	若年	高年	若年	高年	若年
●	●	6	6	0	0	6	6
	○	28	26	2	3	30	29
	●	2	7	0	0	2	7
	○	3	0	0	0	3	0
○	●	0	0	1	1	1	1
	○	3	3	1	2	4	5
	●	0	0	1	0	1	0
	○	0	2	0	0	0	2
○	●	20	22	3	3	23	25
	○	4	0	0	0	4	0
合計		66	66	9	9	75	75

のアクセントが複合語のアクセントに及ぼす影響は少ない。

3—2. 後続単語が2拍の場合

表5は、後続単語が和語名詞2拍語の、3拍語名詞のアクセント型を、先行単語・後続単語のアクセント型の組合せ別にそれぞれの話者について示したものである。

表5-1は1拍語名詞が高起の／高平／型及び、／下降／型が先行する単語に、2拍語の1類～5類までが後続するものをそれぞれの類別に従って示した。

表5-2は低起の／上昇／型が先行する単語について上記と同様にして示したものである。ただし、6名の話者の複合語アクセントの組み合わせが全く同一の単語が2単語以上ある場合については表中では*印を付して省略し、下部にも*印を付して語例をあげた。また、後続単語が○●（／低高／）型である複合語単語につき2類・3類の分類も試みたが、その別による違いを観察するには単語数が少なすぎるため、ここでは統一して／低高／型として処理した。

表5-1の、先行単語が／高平／型の場合は後続単語のアクセント型に関係なく「気儘」(キママ)、(コイヌ)、「戸板」(トイタ)、「気前」(キマエ)のように全体が／高高高／型になりやすい。次いで、「戸口」(トグチ)「背丈」(セタケ)のような／高高低／型が見られる。

先行単語が／下降／型の場合も、後続単語のアクセント型に関係なく、「日柄」(ヒガラ)、**「毛脚」(ケアシ)**、**「毛皮」(ケカウ)**、**「名前」(ナマエ)**のように／高高高／型になりやすく**「薬月」(ハツギ)****「日傘」(ヒガサ)**のように／高低低／型も多い。しかし、**「高年・若年共に「薬虫」「菌糞」「菌茎」は、それぞれ先行単語が高起であるにもかかわらず、低起の／低高低／型で発話されている。**

表5-2の、先行単語が／上昇／型の場合は単語数も多く、「茶粥」(チャガ^ウ)、「木型」(キガ^タ)、「手駒」(テゴ^マ)のような／低低高／型が一番多い。次いで「手品」(テジ^ナ)「目尻」(メジ^リ)「目玉」(メ^タ

表 5-1 後続単語が和語名詞 2 拍の場合
(先行単語が高起)

複合語のアクセント

●→●●●●● ●→●●●●● ●→●●●●● ●→●●●●●
○→○●●●● ○→○●●●● ○→○●●●● ○→○●●●●

先行語と 後行語	話者 複合語	前 年				去 年			
		S	T	A	N	T	M	A	T
●→●●●	伝馬 ^{x1}	●	●	●	●	●	●	●	●
	戸部 ^{x2}	●	●	●	●	●	●	●	●
	小柄	●	●	●	●	●	○	○	○
	血直	●	●	●	○ ₂	●	○	○	○
	藤井	●	●	●	●	●	○	○	○
	戸口	●	●	●	●	●	○	○	○
	閑屋	○	●	●	●	●	○	○	○
	(^{x1} 子族、因所)								
	(^{x2} 播布)								
●→○●○	子大 ^{x3}	●	●	●	●	●	●	●	●
	白子	●	●	●	●	●	○ ₂	●	●
	子揚	●	●	●	●	●	●	●	●
	矢骨	●	●	●	●	●	○	○	○
	背熱	●	●	●	●	●	○	○	○
	血汐	●	●	●	●	●	○	○	○
	背骨	●	●	●	●	●	○	○	○
	腎文	●	●	●	○ ₂	●	●	●	●
	血脚	●	●	●	○ ₂	●	●	●	●
	(^{x3} 気味、子方、子享、黄色、帆船、糖交、血脚、提笠)								
●→○●○	戸部 ^{x4}	●	●	●	●	●	●	●	●
	和子	●	●	●	●	●	○ ₁	○ ₁	○ ₁
	子中	●	●	●	●	●	○	○	○
	子中	●	●	●	●	●	○	○	○
	背筋	●	●	●	○ ₂	●	○ ₁	○ ₁	○ ₁
	血筋	●	●	●	○ ₁	●	○ ₂	○ ₁	○ ₁
	(^{x4} 気味、子族)								
●→○●○	気味 ^{x5}	●	●	●	●	●	●	●	●
	(^{x5} 戸部、子山年、子膝)								
●→●●●	日網 ^{x6}	●	●	●	●	●	●	●	●
	葉来	●	●	●	●	●	○ ₂	●	●
	葉来	●	●	●	●	●	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	名荒	●	●	●	●	●	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	名荒	●	●	●	●	●	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	僧帽	●	●	●	●	●	○ ₁	○ ₁	○ ₁
	葉生	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	葉生	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	(^{x6} 毛趾、日並、日金)								
●→○●○	毛脚 ^{x7}	●	●	●	●	●	●	●	●
	葉月 ^{x8}	●	●	●	○ ₁	●	○ ₁	○ ₁	○ ₁
	日脚	●	●	●	●	●	○ ₁	○ ₁	○ ₁
	個頃	●	●	●	●	●	○	○	○
	葉物	●	●	●	●	●	○ ₂	○ ₁	○ ₁
	葉通	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	(^{x7} 毛脚、日頃)								
	(^{x8} 日脚)								
●→○●○	毛足 ^{x9}	●	●	●	●	●	●	●	●
	日致	●	●	●	●	●	○ ₁	○ ₁	○ ₁
	日	●	●	●	●	●	○	○	○
	日	●	●	●	●	●	○	○	○
	中	●	●	●	○ ₁	●	○ ₁	○ ₁	○ ₁
	日毛脚	●	●	●	●	●	○ ₁	○ ₁	○ ₁
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂	○ ₂
	全主	○ ₂	○ ₂						

表 5-2 後続単語が和語名詞 2 拍語の場合 (先行単語が低起)

先行語と後続語	結合語	高 年					若 年				
		ST	AM	F	I		TM	AU	T	T	
①+●●	根城*11	○	○	○			○	○	○		
	手札*12	○	○	○			○	●	○	○	
	手品*13	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
①+●○	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
①+○○	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	
	手帳	○	○	○	○		○	○	○	○	

マ)のような／低高低／型も見られる。ただし、先行単語が低起式であるにもかかわらず、複合語が／高高高／型の例も少なくない。これらの単語は、「目下」(メシタ)「目上」(メウエ)「手前Ⅰ(自分の目の前の事)」(テマエ)「手前Ⅱ(自分のことをへりくだっていう語の事)」(テマエ)等であり、先行単語である 1 拍語名詞本来の意味がなくなった語は／高高高／型になりやすいとも考えられる。また「火皿」「火箸」「絵筆」「目方」

表 6 後続単語が和語名詞 2 拍語の場合
—実数—

先行	結合語	●●		●○		○○●		○○○		合計	
		高年	若年	高年	若年	高年	若年	高年	若年	高年	若年
●	●●●	21	19	41	39	17	14	12	12	91	84
	●●○	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	●○●	6	3	8	4	8	7	0	0	20	14
	○●●	1	2	0	7	0	1	0	0	3	2
	○○●	2	8	0	7	0	2	0	0	2	17
○	●●●	21	23	17	12	21	17	9	7	68	59
	●●○	0	0	1	0	0	0	2	0	3	0
	●○●	7	3	6	9	9	10	0	1	22	23
	○●●	5	7	3	3	0	2	1	2	9	14
	○○●	0	0	0	3	0	1	0	2	0	6
○	●●●	20	23	15	25	0	10	7	8	42	66
	●●○	4	0	6	0	0	0	0	0	10	0
	●○●	19	35	13	17	12	12	0	1	44	65
	○●●	27	14	54	39	16	8	9	6	116	67
	○○●	40	48	62	69	20	18	11	12	133	147
合 計		183	183	228	228	102	102	51	51	564	564

「尾花」等は、高年・若年にかかわらず、高起の／高低低／型になっているが、どのような先行単語、後続単語ゆえにこのような変化をおこすか、その理由は明らかでない。

表6は、上記の結果を高年・若年それぞれ各型別にまとめて数値で示したものである。各後続単語別に観察しても、後続単語が複合語のアクセント型に与える影響はほ

表7-1 後続単語が漢字音2拍語の場合

[illegible]

とんど見られない。先行単語が高起の場合は複合語も高起の／高高低／型となり、先行単語が低起の場合は複合語も低起の／低低高／型、あるいは、／低高低／型が多く、先行単語の高起・低起が複合語の高起・低起に影響を与えることがその特徴という事ができる。

表7-1には、後続単語が漢字2拍1文字の3拍語名詞のアクセント型を、先行単語・後続単語のアクセント型の組合せ別にそれぞれの話者について示した。

表7-2には、単語数は少ないが、表7-1と同様に後続単語が漢字2拍2文字の場合を示した。

表8には、表7-1、2の結果を各型別に数値で示し、先行単語・後続単語のアクセント型と複合語のアクセントとの関係、及び、高年・若年の違いを見やすくした。

まず、表7-1の(1)(2)つまり先行単語が／高平／型の場合について見ると、高年・若年共に「気品」(キヒン)「気候」(キコウ)のような／高高高／型が最も多いが、その他の型については、高年と若年では違いが見られた。高年は次いで「気分」(ギブン)「医長」(イチョウ)等

表 7-2 後続単語が漢字音 2 拍語の場合

[illegible]

／高低低／型が多い。若年においても同様だが、他に、先行単語が高起であるにもかかわらず「気絶」(キゼツ)のような低起の／低低高／型が多いのが目立つ。

(3)(4)の、先行単語が／下降／型の場合は、とくに若年において先行単語が高起であるにもかかわらず低起の／低低高／型が多い。しかしこれらの単語を見ると、「胃癌」「胃散」「胃酸」「胃病」「胃痛」「胃弱」のように、「胃」を先行単語とする複合語が多く、これらを除くと、高年では先行単語の影響により、「葉蘭」「名題」「値段」等、／高高高／型あるいは／高低低／型の高起単語が若年よりやや多く見られる。

(5)(6)の、先行単語が低起／上昇／型の場合は、高年・若年共に「木偏」(キヘン)「手帳」(テチョウ)「茶会」(チャカイ)のように／低低高／型が最も多い。例外としては「手配」「絵本」「手本」等があり、高年・若年共に／高低低／型で発話されている。

後部が漢字2文字の場合については、「茶風炉」「茶菓子」「酢味噌」等、先行単語が影響を及ぼしているようであるが、単語数が少ないため明確なことはわからない。

上記のように漢字2拍単語が後続する場合においても先行単語の高起・低起によって複合語の高起・低起も定まる傾向があるが、若年においてはアクセントのゆれがみられ、／低低高／型が目立っている。また、後部が和語名詞の場合に比べるとアクセント型の安定度はやや低くなり、この傾向は若年の場合に顕著である。

表8 後続単語が漢字音2拍語の場合
—実数—

先行	後続	●●		●○		○●		合計	
		高年	若年	高年	若年	高年	若年	高年	若年
●	●●●	10	4	15	55			85	59
	●●○	3	0	38	29			41	29
	○○●	2	11	19	48			21	59
○	●●●	1	0	9	1	3	2	13	3
	●●○	0	0	0	1	0	0	0	1
	○○●	0	0	10	10	3	0	13	10
①	●●●	2	3	17	24	0	4	19	31
	●●○	2	1	8	7	1	4	11	12
	○○●	0	1	17	15	2	2	19	18
②	●●●	0	0	7	3	0	0	7	3
	●●○	0	0	7	3	0	0	7	3
	○○●	28	28	52	59	12	9	92	96
合計		48	48	252	252	21	21	321	321

3—3. 後続単語が3拍語及び4拍語の場合

表9は後続単語が和語名詞3拍語の、4拍名詞のアクセント型を先行単語、後

表9 後続単語が和語名詞3拍語の場合

複合語のアクセント
 ●→●●●●○、●→●●●●○、●→●●●○●、●→●●○○○、●→●○○○○、
 ○→○○○○○、○→○○○○○、○→○○○○○

先行語と 後続語	話者 複合語	高 年			若 年		
		ST	AM	FI	TM	AU	TT
●+●●●	戸車	●	●	●	●	○	○
	身勝手	●	●	●	●	○	○
	気位	●	●	●	○	○	○
	子宝	●	●	●	●	○	○
	気心	●	●	●	○	○	○
	身勝手	●	●	○	○	○	○
●+●○○	病機	●	○	○	○	○	○
	血刀	●	●	○	○	○	○
	子孫 ^{※1}	●	●	○	○	○	○
(※1 子孫)							
①+●●●	名所	●	●	○	○	○	○
	東校	●	○	○	○	○	○
	鶴屋	○	○	○	○	○	○
①+●○○	胃袋	○	○	○	○	○	○
	日産	○	○	○	○	○	○
	毛氈	○	○	○	○	○	○
①+○○●	手車 ^{※2}	○	○	○	○	○	○
	野郎	○	○	○	○	○	○
	手序	○	○	○	○	○	○
	手土座	○	○	○	○	○	○
	絵葉書	○	○	○	○	○	○
	(※2 手仕事、野次、目印、茶羽織、茶所、田所)						
①+○○○	茶柱 ^{※3}	○	○	○	○	○	○
	給心 ^{※4}	○	○	○	○	○	○
	手鏡	○	○	○	○	○	○
	手巾	○	○	○	○	○	○
	手袋	○	○	○	○	○	○
	手枕	○	○	○	○	○	○
	火柱	○	○	○	○	○	○
	給婆	○	○	○	○	○	○
	手心	○	○	○	○	○	○
	(※3 茶話、茶袋、目録、目録、絵図、茶ぶき)						
①+○○○	茶柱 ^{※4}	○	○	○	○	○	○
	茶袋	○	○	○	○	○	○
	粉茶	○	○	○	○	○	○
	木耳	○	○	○	○	○	○
①+○○○	目録	○	○	○	○	○	○
	(※5 茶煙、木茶)						
①+○○○	田鼠 ^{※6}	○	○	○	○	○	○
	(※6 野兎)						

統単語のアクセント型の組合せ別に示したものである。左には先行単語が高起の／高平／型及び／下降／型を、右には低起の／上昇／型を配列し、6名のアクセント型の組合わせが同一の場合は前表と同様

*印を付して表の下部に語例を示した。それぞれのアクセント型の組合せによる単語数の少ないのが問題であるが、

高年においては高起・低起の分類はかなり明確である。しかし若年においては白丸が目立ち、ほとんどが低起で発話され／低高低／型となっていることがわかる。

高年では後統単語のアクセント型に関係なく先行単語が高起の／高平／型と／下降／型の場合は「戸車」(トグルマ)「気心」(キゴコロ)「子鼠」(コネズミ)のように／高高低低／型に、低起の／上昇／型が先行する場合は「手車」(テグルマ)「茶柱」(チャバシラ)「田鼠」(タネズミ)のように／低高低低／型になる傾向がある。しかし、若年においては後統単語、先行単語の如何にかかわらず／低高低低／型に統合されるという傾向がある。

表10にはこれらの発話を型別に数値で示し、先行単語・後統単語のアクセント型と複合語のアクセントの関係を見易くした。

表11には、後統単語が漢字2文字3拍語の、4拍語名詞のアクセント型を示した。単語数が少ないため明確なことは言えないが、後統単語が和語名詞の場合とほぼ同一の傾向が見られる。つまり、高年においては多少の例外はあるものの、

表10 後統単語が和語名詞3拍語の場合—実数—

先行	後統語	●●●		●○○		○○○		○○●		合計	
		高年	若年	高年	若年	高年	若年	高年	若年	高年	若年
●	●●●●	1	1	2	1	0	0	0	0	3	2
	●●●○	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0
	●●○●	5	2	7	2	2	0	6	6	20	10
	●●○○	1	0	0	0	1	0	0	0	2	0
	●○●●	0	6	3	9	0	3	0	0	3	18
	●○○●	0	2	0	1	0	0	0	0	0	3
○	●●●●	0	2	0	1	0	0	0	0	0	3
	●●●○	1	0	1	0	0	0	2	0	2	0
	●●○●	5	0	3	0	/	/	2	0	10	0
	●●○○	1	0	1	0	0	0	0	0	2	0
	●○●●	2	7	1	5	0	0	1	3	4	15
	●○○●	0	2	0	1	0	0	0	0	0	3
○	●●●●	2	1	0	0	1	0	0	0	3	1
	●●●○	1	1	9	1	1	0	0	0	11	2
	●●○●	3	2	1	0	3	0	0	0	7	2
	●●○○	27	29	33	45	11	16	6	6	77	98
	●○●●	0	0	2	2	0	0	0	0	4	2
	●○○●	0	0	3	0	0	0	0	0	3	0
合計		51	51	66	66	21	21	15	15	153	153

表11 後統単語が漢字音3拍語の場合

複合語のアクセント

●→●●●●、●→●●●●、●→●●●●、●→●●●●、
○→○●●●、○→○●●●、○→○●●●、○→○●●●

先行語と 後統語	後統語	高 年				若 年			
		ST	AM	F	I	TM	AU	T	T
●+●●●●	身空嵐	●	●	●	●	○	○	○	○
	風雲芳	●	●	●	●	○	○	○	○
	子会社	●	●	●	●	○	○	○	○
	風文天	●	●	●	●	○	○	○	○
○+●●●●	日時計	○	○	○	○	○	○	○	○
	露牡丹	○	○	○	○	○	○	○	○
	胃下量	○	○	○	○	○	○	○	○
	手文庫 ⁽¹⁾	○	○	○	○	○	○	○	○
●+●●●○	火渡船	○	○	○	○	○	○	○	○
	平不足	○	○	○	○	○	○	○	○
	絵図面	○	○	○	○	○	○	○	○
	(x1 手加減, 火加減)	○	○	○	○	○	○	○	○
○+●●○○	給双紙 ⁽²⁾	○	○	○	○	○	○	○	○
	手袋 ⁽³⁾	○	○	○	○	○	○	○	○
	手巾 ⁽⁴⁾	○	○	○	○	○	○	○	○
	(x2 給手本, 手巾工, 手巾子)	○	○	○	○	○	○	○	○
○+○○●○	(x3 餅豆腐, 茶漬, 手解治)	○	○	○	○	○	○	○	○
	茶防生	○	○	○	○	○	○	○	○
	茶防生 ⁽⁵⁾	○	○	○	○	○	○	○	○
	(x4 給日記)	○	○	○	○	○	○	○	○

表12 後統単語が4拍語の場合

複合語のアクセント

●→●●●●●、●→●●●●●、●→●●●●●、●→●●●●●、
○→○●●●●、○→○●●●●、○→○●●●●

先行語と 後統語	後統語	高 年				若 年			
		ST	AM	F	I	TM	AU	T	T
●+○○●○	子沢山	●	●	●	●	○	○	○	○
	胃かいう ⁽¹⁾	○	○	○	○	○	○	○	○
○+●●●●	(x1 胃拡張, 胃ゆる)	○	○	○	○	○	○	○	○
○+●●●○	給雪板 ⁽²⁾	○	○	○	○	○	○	○	○
	(x2 手信号)	○	○	○	○	○	○	○	○
○+●○○○	手内藤 ⁽³⁾	○	○	○	○	○	○	○	○
	(x3 手弁当)	○	○	○	○	○	○	○	○
○+○○●○	手榴彈	○	○	○	○	○	○	○	○
	給空車	○	○	○	○	○	○	○	○
○+○○○○	手一杯	○	○	○	○	○	○	○	○
	(x4 給日記)	○	○	○	○	○	○	○	○

先行単語が高起である／高平／型と／下降／型の場合は「胃下垂」(イカスイ)を除
ぞいて「身支度」(ミジタク)「気苦労」(キグロウ)「日時計」(ヒドケイ)のように
／高高低低／型に、先行単語が低起である／上昇／型の場合は「手文庫」(テランコ)
「絵双紙」(エフウシ)「絵日記」(エニッキ)のように／低高低低／型となる。

高年齢層においては先行単語の高起・低起の別が複合語に影響を及ぼし、アクセント型は／高高低低／型、／低高低低／型となるが、若年齢層においては／低高低低／に統合される。

表12は、後続単語が4拍語名詞のアクセント型を示したものである。単語数が少ないため明確なことはいえないが、これを見ると高年では先行単語が／高平／型である「子沢山」は、(コダクサン)と複合語も高起であるが、同じ高起の下降型である「胃かいよう」「胃拡張」「胃けいれん」はすべて低起の／低高低低低／型となっている。これらは、いずれも「胃」が先行しており、先にも「胃」が先行する場合は低起であったから、もし他の単語が先行する例があれば、その場合は高起であった可能性もあろう。若年ではほとんどが／低高低低低／型である。

3-4. 後続単語が動詞、及び形容詞の場合

表13は後続単語が動詞連用形2拍語、及び3拍語の、複合名詞のアクセント型を先行単語・後続単語のアクセント型の組合せ別に示したものである。

後続単語が2拍語の場合は明らかに特徴がある。表13-1の先行単語が高起の／高平／型と／下降／型の場合は、「気乗り」(キノリ)「値上げ」(ネアゲ)のように／高高高／型になる傾向がある。表13-2の、先行単語が低起の／上昇／型の場合は、「手刷り」(テズリ)「茶漬け」(チャヅケ)「木彫り」(キボリ)「手編み」(テアミ)のように、全体に低起の／低低高／型になる傾向がある。また「田植え」(タウエ)「茶飲み」(チャフミ)等、／低高低／型も見られる。例外としては、「手入れ」(テイレ)「目当て」(メアテ)等がある。またあまり用いることのない「火取り」「火保ち」「根引き」は先行単語が高起である「日取り」「日持ち」「値引き」の影響からそれぞれ(ヒドリ)(ヒモチ)(ネビキ)のように／高高高／型で発話される傾向がある。しかし、全体に見て後続単語がアクセント型に与える影響は見られないが、先行単語の高起・低起が複合語の高起・低起に影響を与えることがわかる。

表13-3の後続単語が3拍語の場合は高年・若年で違いが見られる。高年においては、先行単語が高起の／高平／型、及び、／下降／型の場合は、「身動き」(ミウゴキ)「身振り」(ミブルイ)のように／高高低低／型になる傾向がある。先行単語が低起の／上昇／型の場合は、「絵捜し」(エサガシ)「木登り」(キノボリ)のように、全体に低起の／低高低低／型が多い。しかし、若年では先行単語の高起・低起に関係なく「巣離れ」(スバナレ)「歯ぎしり」(ハギシリ)「目隠し」(メカクシ)のように／低高低低／型に統合される傾向がある。後続単語が動詞連用形の場合においても、後続単語が名詞の場合と類似の傾向であることがわかる。

5. 1 拍語名詞+「の」+ 1 拍語名詞

例えば「木の葉」「木の実」「木の芽」等は助詞「の」が介在して1単語を作っている。この種の結合名詞のアクセントは次のようである。

表18は高年・若年それぞれの発話について、高い拍は●印、音調変化を伴う下降型は①、低い拍は○で示したものである。先行単語が高起/高平/型、/下降/型の場合は結合語の場合も高起であるという点では共通であるが「日の目」(ㄱノメ)「歯の根」(ㄱノネ)のように1語としてのアクセントの統一が見られないものもある。先行単語が低起の場合は結合語も前者に比べて低起の型が見られるが

表18 1 拍語名詞+の+ 1 拍語名詞の場合

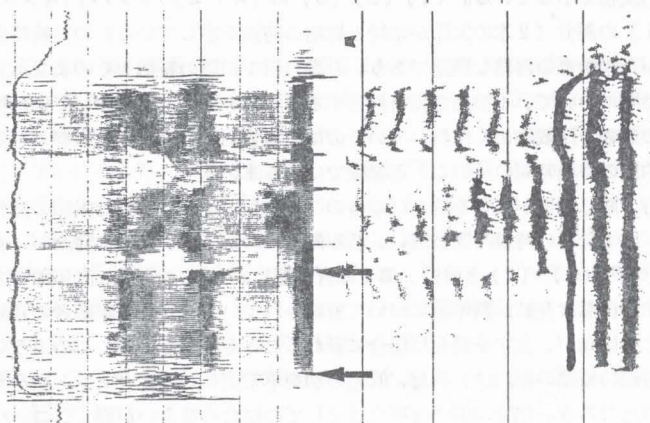
先行語と結合語	話者	高 年			若 年		
		ST	AM	FI	TM	AU	TT
●の● ●の● ●の●	血の気 身の毛	●●○ ●●○ ●●○	●●○ ●●○ ●●○	●●○ ●●○ ●●○	●●○ ●●○ ●●○	●●○ ●●○ ●●○	●●○ ●●○ ●●○
①の●	胃のふ	●○●	○●○	○●○	●○●	○●○	○●○
①の①	日の出 日の目 歯の根	●●○ ●●○ ●●○	○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○	●○● ●○● ●○●	○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○
①の●	木の実(4) 木の実(3) 木の香 火の気 絵の具 火の見 栗の葉	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	●○● ●○● ○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○ ○●○
①の①	木の葉(2) 木の芽(1) 火の粉 火の手	○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○	○●○ ○●○ ○●○ ○●○

「火の気」(ㄱノケ)「絵の具」(ㄱノゲ)「火の手」(ㄱノテ)等、/高高低/型に変化したと見られる例が少なくない。若年齢層においてはとくにその傾向がはなはだしい。これは単なる型変化だけでなく、自然な発話中の、1拍語部分の持続時間に関連のあることに注目したい。

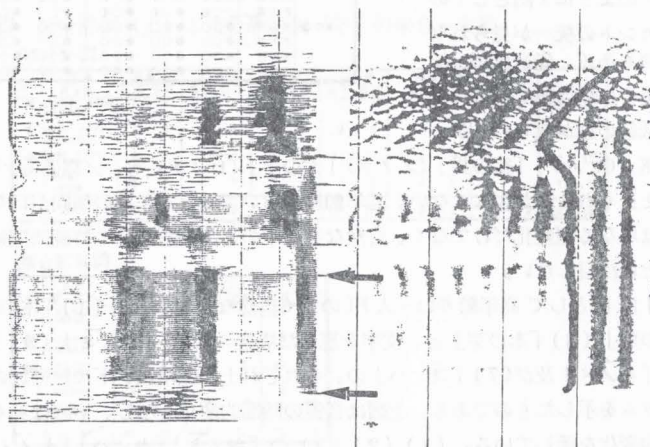
図1は例として高年齢者の一人FIのごく自然な発話による(1)「木の実」、(2)「木の葉」(3)「木の芽」と、文字を読んだ場合の(4)「キノミ」(5)「キノハ」(6)「キノメ」及び(7)「キノハ」の、それぞれ上に広帯域、下に狭帯域のスペクトログラムを示したものである。上図は音質の時間的変化を示し、下図は基本周波数の時間的変化を示している。(1)(2)(3)の「キノミ」「キノハ」「キノメ」ではkiの[i]の部分(2本の矢印が始端と終端の時点を示している)の持続時間が長く、これが高年齢者の自然な発話であり、近畿方言1拍語の特徴をそのまま示している。高年齢層において、1拍語を先行拍とする単語のアクセントにおいて先行拍の高起、低起の影響を比較的好く保持しているのは、複合語においてさえ観察されるこのような1拍語の持続時間の長いことと無縁ではあるまい。

一方、同じ話者が文字を読んだ場合の(4)(5)(6)(7)は矢印の部分が示すように、第1母音の持続時間が短い。若年齢層においては、自然な発話が、すでに、ここに示した(4)~(7)と同様、第1母音が短い。このことは、高年齢層の1拍語を長くする自然な発話が若年齢層において短縮されていること、高年齢者の発話中にもその変化の傾向が、文字を読んだ場合に表れることを示している。このような1拍語の持続時間の短縮の傾向は、高起、低起の別を不安定にし、アクセント型を不安定にする要因となろう。(7)の場合は複合語としての結合の度合いが強く、キノハのように

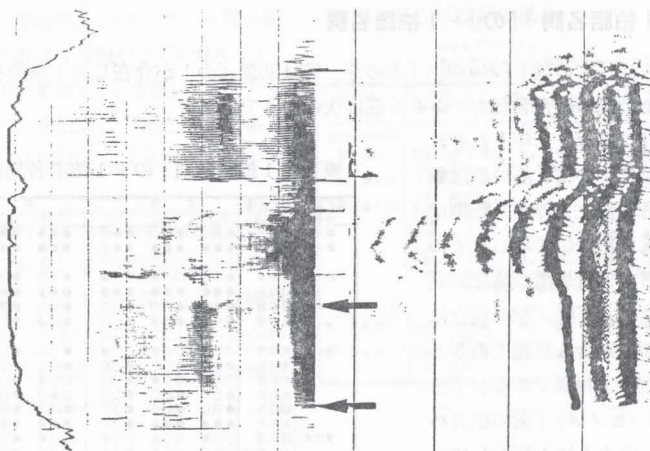
(1)「木の実」(キノミ)



(2)「木の葉」(キノハ)



(3)「木の芽」(キノメ)



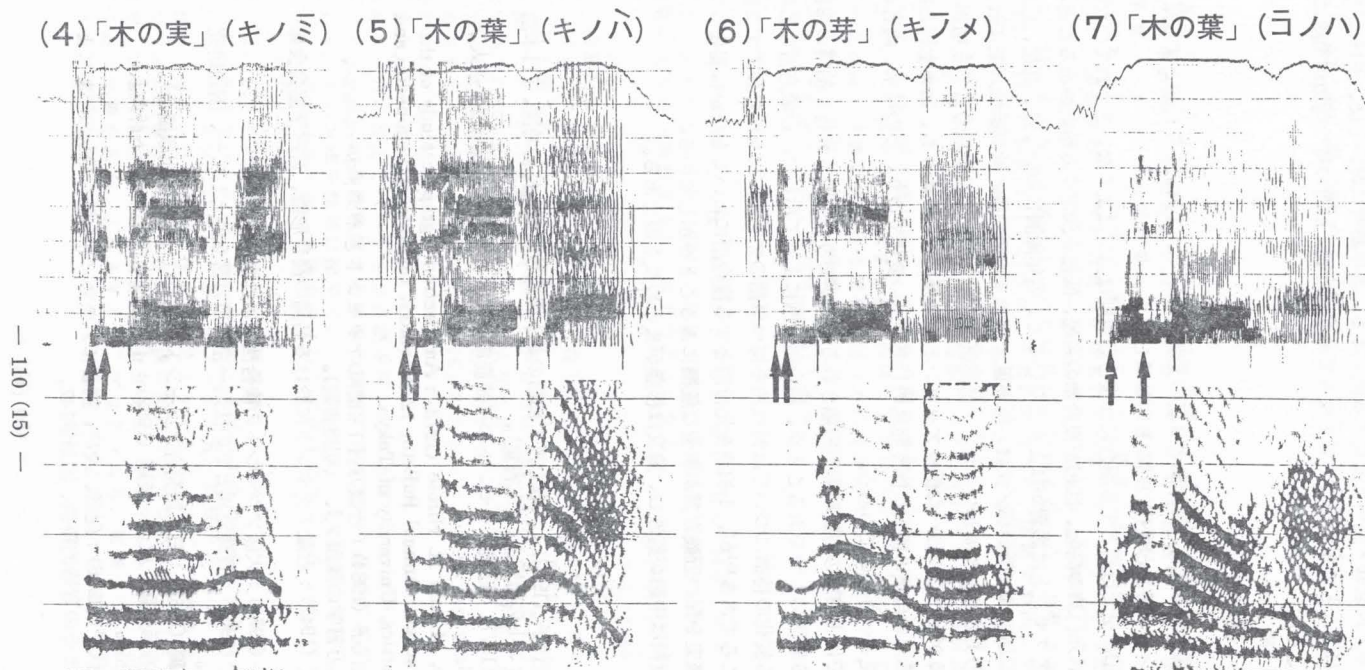


図1 高年齢者の自然な発話(1)「木の実」(2)「木の葉」(3)「木の芽」と文字を読んだ場合(4)「木の実」(5)「木の葉」(6)「木の芽」(7)「木の葉」の広帯域(上)及び狭帯域(下)スペクトログラム

アクセントも／高低低／型へと変化する例である。若年齢層においては、表18に見られるようにほとんどの単語がこの型となっており、近畿1拍語の持つ特徴が希薄になっていることを示している。

6. む す び

大阪市の高年齢者3名、若年齢者3名の発語について、1拍語を先行語とする複合語のアクセントの特徴と変化の傾向を明かにした。

従来、1拍語を先行語とする場合には複合語規則は当てはまらなるとされていたが、この稿では、先行拍の高起、低起が複合語の高起、低起を決定する傾向があること、後続単語のアクセントは影響がほとんどないこと、若年齢層においては、高起、低起の別なく3拍語では／低低高／又は／低高低／型、4拍語では／低高低低／型に統合される傾向のあることを明かにした。／低高低低／型については東京方言でも増加する傾向があるが、ここで述べた例はアクセントの東京化というよりも、始め上昇し続いて下降する声の自然の盛衰に伴う発話のし易さへの変化であり、その結果、両者が一致すると見るべきものであろう。

若い世代では1拍語の持続時間が短縮される傾向があり、これも先行1拍語の影響を少なくする原因の1つであることを、結合語の例によって示した。近畿方言の若年齢層における変化の特徴については特殊拍を持つ単語のアクセントを例としてすでに指摘したところである¹⁰⁾が、1拍語を先行語とする複合語においても明かに変化しており、長い歴史を保つ近畿方言が重要な危機にあることを示している。

この稿の資料は中納が整理し、論文は杉藤がまとめたものである。

文 献

- 1) 杉藤美代子 (1982) : 大阪方言 1 拍語の基本周波数曲線と持続時間、『日本語アクセントの研究』、(三省堂)。
- 2) — (1977) : 近畿アクセントの喉頭筋電図による考察、大阪樟蔭女子大学論集14。
- 3) Sugito, M. and H. Hirose (1978) : An electromyographic study of the kinky accent, Annual Bulletin 12, Research Institute of Logopedics and Phoniatrics, University of Tokyo.
- 4) 杉藤美代子 (1984) : 近畿方言 1 拍語のアクセントとイントネーション、『現代方言学の課題 2』、(明治書院)。
- 5) 和田実 (1942) : 近畿アクセントに於ける名詞の複合形態、音声学協会会報71号。
- 6) 前田勇 (1953) : 大阪アクセントの複合法則、近畿方言19。
- 7) 株垣実 (1963) : 音調差異とその法則—京都市方言を例として—、国語研究第15号。
- 8) NHK編 (1985) : 日本語発音アクセント辞典』、(日本放送出版協会)。
- 9) 金田一春彦監修、秋永一枝編 (1982) : 『明解日本語アクセント辞典』、(三省堂)。
- 10) 杉藤美代子 (1986) : 促音、及び、撥音にアクセントを置く発話の年齢による変化とその音響的特徴、国語学147。